HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	池上先生とウイルタ語学
Author(s)	山田, 祥子
Description	シンポジウム報告
Citation	北方人文研究, 5, 179-191
Issue Date	2012-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/49316
Type	other
File Information	13journal05-yamada.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

〈シンポジウム報告〉

池上先生とウイルタ語学[1]

山田　祥子
（北海道立北方民族博物館　学芸員）

はじめに

池上二良先生の幅広い研究活動のなかでも、本報告はウイルタ語に焦点を当てる。残念ながら、筆者は池上先生から直接のご指導を受けることができなかったが、2005 年にウイルタ語を勉強し始めたとき以来、池上先生の論著を「学問」の場とし、先生がご自身のフィールドで築いた信頼関係に支えられ続けてきた。先生を直接に知る方々にとっては物足りない内容になるかもしれないが、間接的にではあれ先生からご恩を受けてきた者として、感謝と敬意を込めて報告させていただきたい。

なお、サハリンのウイルタ語話者である I. Ja. Fedjaeva（イリーナ・フェジャエワ；以下フェジャエワ）さん、E. A. Bibikova（エレーナ・ビビコワ；以下ビビコワ）さんからお預かりしたメッセージを、本誌研究ノート「ウイルタ語北方言テキスト」として投稿させていただいた。フィールドの人々からの声として、そちらも参照されたい。

以下、次のような流れで池上先生のウイルタ語研究の足跡をたどる。まず 1 節で、ウイルタという民族、および池上先生以前のウイルタ語の記録・研究について概観する。2 節では、池上先生の調査・研究活動について、著述をとおしてわかることを報告する。最後に 3 節で、池上先生のウイルタ語研究が何を残し、私たちは何を受け継ぐのか、フィールドの人々と筆者自身の観点からまとめることにする。

1. ウイルタとウイルタ語研究

1.1 ウイルタとは

はじめに、「ウイルタ」と私たちが呼ぶ人々のことを紹介したい。ウイルタは、北海道の北隣に位置するサハリン島の先住民族である。ツングース諸語を話す人々のなかでは、私たちの暮らす日本に、とりわけ北海道に最も近いところで暮らしてきた民族であるといえよう。サハリンの先住民族には、ほかにニヴフ、サハリンアイヌの人々が挙げられる。言語系統や生業形態は異なるが、ウイルタはニヴフやサハリンアイヌの人々と地理的に近接している。

民族の名称について、1970/ 80 年代までは「オロッコ」が一般的だったが、1980/ 90 年代から彼ら自身のことばでこの民族を「ウイルタ」と呼ぶのにしたがう動きが徐々に広がった[2]。後述の池上先生の論著でも、1970 年代までは「オロッコ」、80 年代からは「ウイルタ」とな

---

1 本稿は、北海道大学大学院文学研究科北方研究教育センター主催「池上二良先生追悼シンポジウム：北方言語研究の歩み」（2011-12-17、北海道大学）で報告した内容を修正・加筆したものである。シンポジウムを主催・企画してくださった皆様、当日会場でご清聴くださった皆様、そして、本稿の執筆に際して貴重なご助言をくださった津曲敏郎先生、笹倉いる美さんに、記して感謝申し上げる。

2 今日まで、民族の呼び方にばらつきがある。文献やインターネット記事などでは、今でもオロッコ（Orok）と記されることが多い。一方、今日サハリンでは自他ともに Orochon という呼称が通用している（Missonova 2006: 64 にもとづく）。近年、日本では一般にウイルタあるいはウィルタ、ロシアの文献や報道などでは Ujl'ta あるいは Ul'ta と呼ばれることが多くなった。

っている。

ウイルタは伝統的な生業としてトナカイ遊牧を行い、島の北東部を季節的に移動する生活を営んできた。おおむね**図** 1 右上の黒塗りの部分がウイルタの伝統的な活動範囲だったといわれている（Roon 1996／ローン 2005）。

日露戦争後から第二次世界大戦終結まで約 40 年間、この島は北緯 50 度線上に引かれた日本とロシアの国境で分断された。このとき、北の地方に住んでいたウイルタはロシアおよび旧ソ連の側に、南の地方に住んでいたウイルタは日本の支配下におかれた。戦後には、南の地方のウイルタの人たち数世帯が北海道へ移住している。

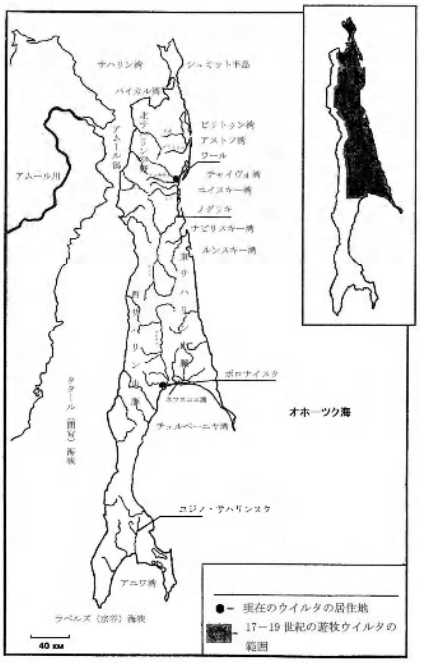

図 1　ウイルタの居住域（ローン 2005 を一部改変）

2010 年現在、サハリン州内のウイルタ人口 362 人のうち、約半数の 156 人が北東海岸近くのノグリキ都市管区、とくにそのなかのワール村に、他方の約半数 178 人は中部のチェルペーニヤ湾岸のポロナイスク都市管区に居住する（SEIC 2010: 15）。言い換えると、おおまかにはワールに住む北のグループと、ポロナイスクに住む南のグループに分かれる。

1.2 ウイルタ語の記録と研究

ここでは、池上先生以前に行われたウイルタ語の記録と研究について、とくに松浦武四郎、B. ピウスツキ、中目覚、川村秀弥、澗潟久治、服部健に焦点をしぼり、ごく簡略に紹介する。研究史について、詳しくは Ikegami（1993）を参照されたい。

松浦武四郎（1818-1888）は、19 世紀なかごろにサハリン南部を探検し、ウイルタ語語彙（約 350 語）をカナ書きで採録した。その記録は、池上（1971）によって活字化され、公に参照できるかたちとなった。

ポーランドの Bronislaw Pilsudski（1866-1918、ブロニスラウ・ピウスツキ；以下、ピウスツキ）は、1902～1905 年サハリンに滞在した。その間にポロナイ川河口近くでウイルタ語を調査し、約 2000 語の語彙、口承文芸のテキストの記録、および文法記述を残した（Majewicz 1987: 12, 池上 1987b [2001: 222]）。これらの記録はポーランド語で書かれたものだったが、のちに Majewicz（1987）が英訳とロシア語訳を付けて刊行し、広く参照できるかたちとなった。

中目覚（1899-1980）は、1912～1913 年、当時日本領だったサハリン南部を調査した。1917 年に文法書『オロッコ文典』（中目 1917）を発表している。また、1928 年に同書のドイツ語訳を刊行した（Nakanome 1928）。

川村秀弥（1884-1956）は、オタスの教育所で教鞭を執りながら、先住民の文化や言語について記録を残した。ウイルタ語とニヴフ語を並べるようなかたちで語彙などを列記した手記（川村 1940）は、池上（1983）によって活字化された。

澗潟久治（1899-1981）は、1928～1935 年の間に計 4 回、オタスとその周辺のウイルタを調査した。そのときの語彙と例文の記録は、戦後に北海道へ移住したウイルタの人々や池上先生との交流のなかで長い年月をかけて増補・改訂が加えられた。その成果は、1981 年に『ウ

イルタ語辞典』（澗潟 1981）として刊行された。

服部健（1909-1991）は、ニヴフ語の研究者として著名だが、ウイルタ語についても貴重な記録を残している。公刊されているものでは、ウイルタ語テキスト「北風と太陽」がある（服部 1943 [2000]）。

ここに挙げたもの以外でも、ウイルタ語の記録や研究は質量ともにさまざまなかたちで行われていた。次節から辿っていく池上先生の調査・研究活動の出発点には、こうして国内外に散見される資料の存在を把握するところにあったのではないかと思う。

2. 池上先生の調査・研究活動

2.1 北海道で（1949〜）

2.1.1 「生きた」言語への渇望

池上先生の著述目録（本誌掲載）を見ると、ウイルタ（オロッコ）語を主題とする最初の論文は、1949 年に発表された「ツングース語オロッコ方言のその近隣方言間における位置」（池上 1949 [2001]）である。ここでは、当時の人類学におけるウイルタの系統的な位置づけに関する議論に対し、言語学の立場から「ウイルタ語はオロチ語よりもウルチャ（オルチャ）語に近い」という見解を示した。

池上（1949 [2001]）が資料として用いたのは、上述の中目（1917）／Nakanome（1928）、および服部（1943 [2000]）だった。もっとも、「服部氏の資料は貴重であるが分量が少なく、中目氏のそれは言語学的に不正確な点があるとみられる。そのためそれに基づく考察も残念ながら制限されざるをえない」（池上 1949 [2001: 233]）という記述から、資料の不足に対するもどかしさ、「生きた」ウイルタ語への渇望のようなものがうかがわれる[3]。

だが、この論文が書かれてから先生が「生きた」ウイルタ語に出会うまで、長くはかからなかった。後の記事（池上 1970, 1977 など）によると、上述の論文刊行の 1949 年に、先生はウイルタ語話者と出会い、フィールド調査を始めている。

2.1.2 被調査者との信頼関係

池上先生は、終戦後にサハリンの旧日本領（樺太）から北海道へ移住したウイルタの人々を訪ねて行って、ウイルタ語を母語として話す人たちから生の情報を得ることに成功した。池上先生のウイルタ語のフィールド調査は、それから 40 年近く北海道で続けられた。以下、おもに 1977 年発行の『日本経済新聞』掲載記事（池上 1977）をもとに、先生の調査・研究活動を辿ってみたい。

何人もの被調査者のなかで先生の研究に最も多く寄与した方として、佐藤チヨ（ウイルタ名 Napka）さんが挙げられる。池上（1977）によると、佐藤さんは「被調査者として、実にすぐれた資質をもっている。こちらの質問に対する答えは的確であり、余計な説明は加えない」という、理想的な被調査者だったようである。「口頭文芸のすぐれた保持者」でもあり、先生は、佐藤さんの語る物語や歌謡、なぞなぞなど、多くを採録された（池上 1984 [2001]参考）。録音資料のうち長いものでは、筆者が知るかぎり、一篇 4 時間 40 分の語りもの（ニグマー）「シーグーニ物語」がある（ibid.）。

先生が佐藤さんに向けられた深い敬愛は、1985 年に亡くなられた佐藤さんへの告別のこと

[3] なお、この論文では、そのほか服部氏に未発表の資料があること、そして、澗潟氏やピウスツキの資料の存在に言及している。

ば（池上 1986b）や、『ウイルタ語辞典』（池上 1997）の中表紙の裏の謝辞に込められている。ここでは後者に訳を添えて、引用する。

> *satoo　mamaŋunnee　／　sittəi　jəə　bičixxəə　bөөmi　／　agdapsee　unǰiwi.*
> 「佐藤さん　／　あなたにこの本をささげ　／　ありがとうと言います」
> （池上 1997：中表紙裏；原文の改行を／に代える。日本語訳は山田による。）

この一文はただウイルタ語音韻表記だけでひっそりと記されている。他の誰でもなく、純粋に佐藤さんへ向けられた気持ちだったのだと思う。こうしたことばから、池上先生のウイルタ語研究が、被調査者の優れた資質、それを引き出す調査者、そして、両者を結び付ける敬愛と信頼関係のうえに立っていたということを深く考えさせられる。

2.1.3 手堅い調査と手広い考察

ところで、池上（1977）に次のようなエピソードも書かれている。ウイルタ語の音韻表記を補足して、一部引用する。

> こんなこともあった。アウハ/au-**xa**/「ねむった」、テエヘ /təə-**xə**/「おきた」、ソゴホ/soŋo-**xo**/「泣いた」のような動詞の完了形を調べていた。アウ /au-/、テエ /təə-/、ソゴ /soŋo-/ は動詞の語幹で、そのあとのハ /-**xa**/、ヘ /-**xə**/、ホ /-**xo**/ は、完了の意味の動詞語尾がそれぞれの動詞で形をかえたものである。[…]　聞いているうちに、「与えた」の完了形の発音に疑問が生じた。はじめブウヘ /? buu-**xə**/ かと思ったが、ブウホ /? buu-**xo**/とも聞こえる。ウイルタ語では、単語のなかで、普通 U /u/ のあとに短母音の O /o/ がくることがない。そこであらためてその発音を注意して聞くと、実はブウホのホの母音は、ソゴホ /soŋo-**xo**/ の O /o/ よりもっと舌を持ち上げて発音する別の O /ө/であった（池上 1977；/ /で示す音韻表記は山田による）。

このときに池上先生が確認した「別の O」すなわち/ө/については、1953 年の論文（池上 1953 [2001]）に詳しく述べられている。それによると、母音音素に隣接しない/ө/は「ややせまい前寄りの後舌円唇母音」（IPA 音声記号で[o̞]）に該当する（池上 1953 [2001: 136]）。ソゴホ/soŋo-**xo**/「泣いた」の母音 /o/（IPA 音声記号で[ɔ]）と比べると、/ө/は舌をやや前寄りに上げて発音するのが特徴である。

音声として異なるということ自体、よほど注意しないと気付かない。池上先生が何度も話者に発音させ、耳で聴くだけでなく目で見て入念に確かめていることは、上掲の記事や論文から明らかである。池上（1953 [2001]）には話し手の口形の写真まで載っている。微細な違いまで逃すまいという、非常に手堅い調査あってこその発見である。

しかし、この発見の重要性は音声の微妙な違いではなく、このツングース諸語全体を視野に入れたうえで、[ɔ]と[o̞]を区別すべきなのだという主張が導き出されたことにあった。先生は論文（池上 1953 [2001]）のなかで、ウイルタ語の/ө/と満洲語文語の母音字 u との対応を例示し、また、旧ソ連の諸文献を参考にしてソロン語やエヴェンキ語にも同様の母音がある「蓋然性が高い」と指摘した。後年には、やはり旧ソ連で刊行された辞書からエウェン語にもあることを確認している（池上 1977）。池上（1953 [2001]）の結論にあたる部分を、以下に引用する。

> 母音音素/ɵ/に該当すべき中舌的な中開き円唇母音がオロッコ方言［ウイルタ語］以外にも少なくとも一部の方言［ツングース諸語に属する言語］にはあるとみておそらく誤りでないであろう。しかし従来の記述はこの点必ずしも正確とはみられない。もしツングース語において/ɵ/に該当すべきかかる母音とほかの母音との差異を無視するならばそれはあだかも蒙古語において[ö]とほかの母音との差異を無視するのに等しく、言語の記述の誤りとなるばかりでなくツングース語方言の比較研究、さらにアルタイ諸言語の比較研究にとっても重大な欠陥となる。ここにツングース語のかかる母音差異を記述することがツングース語研究にとって重要であることを強調したい（池上 1953 [2001: 139]；［　］は筆者による）。

国内外の文献を読破した手広い考察により蓄積された豊富な知識と、モンゴル語などアルタイ諸言語も一望する壮大な視野――。上述の非常に手堅い調査は、この二つと不可分に結びついていた。先生にとって音素記号/ɵ/の横棒は、あたかも望遠鏡のレンズから覗き見る大陸の地平線のように果てなく広がる重要な意味を持っていたのだと思う。

2.1.4 シンプルな動機と多彩な成果

さて、池上先生はどうしてここまでウイルタ語の調査・研究に傾倒されたのか。池上（1977）で、次のように述べられている。研究の動機は意外なほどシンプルだったようだ。

> なぜウイルタのことばなど勉強するのかということを、いつも彼女［佐藤チヨさん］から聞かれる。そのことはなかなか納得してもらえない。しかし私自身よく説明できないというのが、本当かもしれない。やはりそこにあるから、とでもいうほかないだろうか。（池上 1977;［　］は筆者による）

池上先生の数多い論著を概観すると、ウイルタ語を主題として扱ったものが数多い。件数でいえば、全体のおよそ四分の一に当たる（本誌「池上二良先生著述目録」分類略表を参照）。そして、その大部分は 1950～80 年代にかけて北海道で行われた調査・研究活動がもとになっている。旅行も情報収集も現在ほど自由でない時代に、先生は「そこにある」山を地道な努力で登りつづけて、大きなことを成し遂げられたのだと思う。

2.2 サハリンで

2.2.1 北方言の調査を開始

1990 年、池上先生のフィールドはサハリンへと拡がった。村崎恭子先生（当時、横浜国立大学教授）の代表する科研プロジェクト「サハリンにおける少数民族の言語に関する調査研究」の研究分担者の一人として訪問したのが最初として、2001 年まで継続的に訪問しておられる。

先生にとっての新たな調査フィールドは、未踏の「地」というよりは、言語の話し手である「人」にあった。それまでの北海道での調査は、旧日本領であったポロナイスク（旧敷香）地方からの移住者、すなわち、もっぱら南のグループのウイルタが対象だった。だが、このサハリン訪問で先生は初めてワール村を訪れ、北のグループのウイルタの人々と面会することができた。

池上（1993 [2001: 286]）で述べられているように、それまでは南北のウイルタ語を比べてその相違点を精細に扱う研究はなかった。先生はワール村での調査によって南北のグループ

の間に方言差があることを確認し、その音韻・文法・語彙の相違について池上（1994 [2001]）で報告された[4]。

なお、ワール村の人たちにとっても、池上先生の来訪は忘れられない出来事になったようだ。最初の訪問を受け入れたフェジャエワさん、ビビコワさんは当時のことを振り返るたび、思い出話に華を咲かせる。来るなり「ソロジェー」とウイルタ語で挨拶してきた日本人教授に驚いたこと、その教授が古老たちに延々と質問をして一同を悩ませたことなど、談笑とともに語られるエピソードは、本誌研究ノートで参照されたい。

2.2.2 文字策定に尽力

サハリンでの調査が始まったのと時をほぼ同じくして、サハリン州政府によるウイルタ語教育の実施計画に池上先生も参加することになった[5]。ウイルタ語を知らない世代にこの語を教えるためには、まず表記する文字を定め、書き言葉を用意しなければならない。

池上先生は 1992 年から 3 度にわたって、書き言葉策定に向けた案をまとめ、文書で提出した（3 篇の文書は Ikegami 1994, 1996, 1998 で刊行；いずれも池上 2001 に収録）。また、1993 年には文字案を検討する会がモスクワのロシア科学アカデミー言語学研究所で行われ、池上先生やフェジャエワさんも出席した。

先生は、ウイルタ語本来の特徴を失わないように、古い特徴を残す南方言の音韻体系で書き表すべきだと主張した（Ikegami 1994 [2001: 146]）。これは、北方言には比較的最近の変化が加わっているという見解によるものだった。この主張は審議を通り、上述の/ɵ/など特殊文字を含む 25 の文字で構成することになった。

ただし、先生の意見が通らなかった点もある。たとえば、当初の案（Ikegami 1994[2001]）で先生はローマ字を推奨したが、現地でロシア語を日常に話す人々が親しみやすいように、特殊文字以外はロシア字で記す方法が採用されることとなった[6]。

2.2.3 文字教本の編集

文字の策定と並行して、文字教本の編集も進められた。この作業には、関心のある 4 人のウイルタ出身者として、上述のフェジャエワさん、ビビコワさんのほか、南方言の話者として S. Minato（ミナト　シリュコ；以下ミナト）さん、L. R. Kitazima（キタジマ　リュボーヴィ；以下キタジマ）さんが加わった。池上先生が最後にサハリンを訪問された 2001 年まで 10 年近く続いたこの作業では、通訳などの補助として他にもさまざまな方が作業に関わったそうだ。

ウイルタ語の文字教本を作ることについて、周囲は「既存のロシア語教材をウイルタ語に訳すだけ」というくらいに考えていたという。しかし、ロシア語とウイルタ語の仕組みがまったく異なる以上、事はそう容易ではない。話し言葉を決まった方式で書き表し、そこに「文法」を見出すということは、4 人の話者たちにとっても大きな試練となったようである。人によっては編集の打ち合わせを途中でやめたくなるようなこともあったらしい。そういうと

---

[4] 本稿では、池上（1994[2001]）同様ウイルタ語による地名 waalu にもとづいて「ワール」と表記している。なお、ロシア語では同じ土地を Val「ヴァル」とよぶ。

[5] 池上先生とともにこの計画に参加した Ju. A. Sem 教授（サンクトペテルブルグ教育大学）は、残念ながら翌 1991 年に亡くなられた。

[6] 池上（1993 [2001: 290]）では、ロシア字を用いることを認めつつ「ただし、ウイルタ語の文字表記が普及した段階でローマ字に替えることが望ましい」と述べられている。なお、ウイルタ語の書き言葉について、池上（2000）および拙稿（山田 2008）も参照されたい。

き、池上先生は相手を叱るようなことはなく、むしろ穏やかに「ゆっくりやりましょう」と言って励ましてくれたという（本誌研究ノートより）。

4 人のなかでは特にビビコワさんが中心となって学習用の語例・例文を用意し、池上先生がサハリンへ来てその見直しをするというかたちで、文字教本の編集が進められた（池上 2000: 75）。ビビコワさんは、2009 年 6 月に札幌で行われた講演会で次のように当時のことを振り返っている。

> 池上先生は非常に熱心な、またまじめな方で、この文字教本のなかに悪い言葉が入ることを非常に嫌いました。つまり、「けんか」とかそういったネガティブな意味をもつ言葉をこの教本のなかに入れることを許してくれませんでした。私が最後にこの文字教本の手稿を持ってきたとき、池上先生はまたしてもそこに望ましくない言葉を見つけてしまったのですけれども、その時はもう出版までの時間も迫っていたことだし「まあ、良いでしょう」とどうにか見逃してくれました。（山田 2010: 106；ビビコワ氏講演録より）

ビビコワさんらのことばから、先生は言語に対して一点の妥協も見せない厳しい目をもつ一方で、人に対しては常に温厚で思いやりにあふれる方だったことが伝わってくる（本誌研究ノートも参照）。このことは、北海道での調査で佐藤さんらに向けられた敬愛というのと表裏一体であるように思う。

3. 池上先生のウイルタ語研究が残したもの

3.1 ウイルタの故地に

3.1.1 書き言葉

池上先生の研究活動は、ウイルタの故地であるサハリンに大きな成果を残した。その一つが、ウイルタ語の書き言葉である。

先生の指導のもと話者の共同によって編集の進められた文字教本は、2002 年におおむね完成したが、すぐに出版の資金を得ることができなかった。ビビコワさんやフェジャエワさん、サハリン州立郷土博物館の T. P. Roon（タチヤーナ・ローン；以下ローン）館長、さらにはロシア科学アカデミー人類学研究所の L. I. Missonova（リュドミーラ・ミソーノワ）研究員が手伝って、資金源を求めてあちこちへ手紙を書いたという。最終的には、手紙を受けたサハリンエナジー社とサハリン州政府の共同で出資して、出版が実現した。

ユジノサハリンスクで盛大な出版祝賀会が催されたのは、2008 年春のことだった。文字教本の編者には、池上先生を筆頭に、4 人のウイルタ語話者、ローン館長の名前が掲げられた（Ikegami et al. 2008）。池上先生の研究を基礎として策定された文字、先生とサハリンの話者たちとの共同作業、それにさまざまな人たちの助力が加わって実を結んだ、大きな成果である。これによって、ウイルタ語に書き言葉ができ、言語を次世代に伝える教育の材料が得られた。

3.1.2 「伝承者」たち

書き言葉と並ぶ成果として、池上先生はサハリンで「伝承者」を育てた。ビビコワさんは「池上先生と出会ったおかげで、私たちは自分たちの文化や自分たちの言語をまったく新しい視点から見るようになりました」と語る（山田 2010: 105）。ロシア語が日常語として定着した社会のなかで母語の価値を見失っていた人たちが、先生との出会いを通じてその価値に気付き、次世代へ伝える活動に立ち上がった。なかでも文字教本の編集に参加した 4 人の話

者たちは、皆それぞれの場で「伝承者」として活躍している。

フェジャエワさん（ワール村在住）は、ワール村の幼稚園でウイルタ語を教えた。90 年代から同村を代わるがわる訪れてくる研究者と協力し、ワール村の「窓口」のような存在となっている。ロシアの研究者と協力し、『ウイルタ-ロシア／ロシア-ウイルタ語辞典』（Ozolinja & Fedjaeva 2003）を共編した。

キタジマさん（ポロナイスク市在住）は、民族アンサンブル「メグメ・イルガ」での活躍のほか、やはり研究者への協力も惜しまず、ウイルタの文化保存活動に貢献する。サハリン・日本との文化交流の担い手でもある。

ミナトさん（ポロナイスク市在住）も、民族アンサンブル「メグメ・イルガ」で活躍された。2012 年現在、ポロナイスク郊外にある学校でウイルタ語・ウイルタ文化を教えている。ウイルタ語を教える正規の授業としては、サハリンで唯一の取り組みである。

ビビコワさん（ノグリキ町在住）は、民芸品制作や研究者協力のかたわら、ウイルタ語教育の構想をあたため続けてきた。そして 2010 年秋、いよいよ有志を集めてウイルタ語教室を開始。ノグリキ町立郷土博物館の協力を得て、大人も子どもも一緒に学ぶ親子教室のようなかたちで続けている。文字教本（Ikegami et al. 2008）を用い、できるかぎり若い世代に進行役を任せるようにしている。2012 年 1 月現在、ビビコワさんの娘 V. V. Osipova（ヴェロニカ・オシポワ）さんが進行役を務めている（ビビコワ p.c.）。

3.2 後進の研究者に

3.2.1 「ウイルタ語学」

後進の研究者にとっても、池上先生のウイルタ語研究が残したものの大きさは計り知れない。その一つは、ウイルタ語を学ぶ場としての論著や資料である。まるであらかじめ計画されていたかのように首尾一貫したその内容が、先生の「ウイルタ語学」を大成している。

『ウイルタ語辞典』（池上 1997）は、音韻論の概要と語彙を集成する。同書の編集に携わった笹倉いる美さん（p.c.）によると、先生は情報の確かさに少しでもためらいのある内容はすべてカットしたという。それでも約 4500 語もの見出し語と多くの例文、さらには図解、分類語彙、基礎単語日本語索引など、単なる「辞典」の域を超えた豊富な内容を含んでいる。

『ツングース語研究』（池上 2001）には、ウイルタ語の文法記述に当たる論考が集約されている。いずれも、ツングース諸語の比較研究を視野に入れた内容で、“The Substantive Inflection of Orok”（池上 1956 [2001]）、“The Verb Inflection of Orok”（池上 1959 [2001]）ほか、全 32 篇の論文を収録する。ウイルタ語の「文法書」ともいえる一冊である。

『増訂ウイルタ口頭文芸原文集』（池上 2002b）は、池上先生が長い年月をかけて蒐集したウイルタ語テキストを音声 CD とともに刊行したものである。国内外をみても、ウイルタ語テキスト集として最大のものといえよう。

また、書誌学的な成果にも注意を向けたい。ウイルタ研究に関する古い資料を見出し整理した訳解資料に、上述の松浦武四郎の語彙集を活字化した「十九世紀なかごろのオロッコ語集：サンタン語・ギリヤーク語をふくむ 」（池上 1971b [2002a]）などがある。

言語学に収まらない分野横断的な成果として、「ウイルタ民俗文化財緊急調査報告書」計 13 冊がある。これは 1978～85・87～91 年に北海道教育委員会が行った同名の事業で、池上先生に依頼された調査の報告書である[7]。調査では、それまでに国内各地に収蔵されているウイルタの民族資料を質問の材料として北海道在住のウイルタ出身者に尋ねるという方法がと

[7] 2 年目以降、網走市北方民俗文化保存協会から同じ報告書が単行本として発行された。

られた（池上 1987a, 1993 [2001: 285]）。『ウイルタ古画集録』（池上 1979）、『ウイルタの暮しと民具』（池上 1982）では、全国各地に散在する図絵や民具などの資料の写真と関連情報が収載されている。そのほか、同調査の一環として、澗潟久治氏の『ウイルタ語辞典』（澗潟 1981）、『川村秀弥採録カラフト諸民族の言語と民俗』（池上 1983）、『「ぎりやーく・おろっこ器物解説書」・北川源太郎筆録「ウイルタのことば（1）」』（池上 1986）など、ご自身のものでない成果の公刊も積極的に行われた。

『北方言語叢考』（池上 2004）には、類型論や言語接触などの問題に関連する論考が計 15 篇収められている。「日本語・北の言語の単語借用」（池上 1990）、「北アジア言語の動詞の構造と格支配：動作対象の表示に関して」（池上 1992）など、ツングース諸語からさらに視野を広げて地域的な関係性を考えるうえで重要な示唆を与える。

3.2.2 「フィールド」

池上先生の研究は、さらなる問いを立てて探究していく「フィールド」を拓いた。先生が最後にサハリンを訪問された 2001 年以降も、現地の話者や関係者はずっとその再訪を待っていた。それほどに“Professor Ikegami”の人望は厚く、先生の後に続いて現地に入る者にまで及んでいる。

筆者も、その大きな恩恵を受ける者の一人である。初めてサハリンを訪問しフィールド調査を行う機会を得たのは、2008 年 4 月だった。体調の優れない池上先生に代わってウイルタ語文字教本の出版祝賀会に出席された津曲敏郎先生（北海道大学）に同行させていただき、ユジノサハリンスクでビビコワさんらと知り合うことができた。同年 9 月にはロシア科学アカデミー言語学研究所の A. M. Pevnov（アレクサンドル・ペヴノフ）先生の調査に同行させていただき、ワール村を訪ねた。現地ではフェジャエワさんが村じゅうのウイルタ語話者を自宅に呼んで、初日から調査環境を整えてくれていた。2010 年度にはサハリン州立郷土博物館の受入れでサハリンに長期滞在[8]し、その間もポロナイスクのキタジマさんやミナトさんを訪問したり、トナカイ飼育地でウイルタの伝統的な生業活動を観察したり[9]と、調査の場を広げることができた。こうして振り返ると、池上先生と縁故の人たちの支援なくして成し遂げられたことなど一つもない。先生が築かれた信頼関係を、これからもつなげていきたいと思っている。

3.2.3 課題と使命（まとめに代えて）

池上先生は、ご自身の研究を完遂された。上記の論著・資料の数々を見、縁故の人たちから話を伺うたび、先生のウイルタ研究に「やり残し」などないように思われる。その意味で、先生が「残した」課題と使命というのは語弊があるかもしれない。ここでは、先生の研究の流れを継いで取り組むべき課題を、記録と研究の分野に分けて指摘したい。

ウイルタ語の記録に関する課題の一つは、国内外に散在する古い記録を整理・保存することである。筆者の知る範囲では、ロシアでは L. I. Sem, T. I. Petrova, K. A. Novikova などに未公開の記録がある。国内では、服部健氏の資料などのほか、池上先生にも未公開の記録がある。佐藤さんから採録された上述の語りもの（ニグマー）の記録も筆者がお預かりして整理をしているが、まだ資料として完成していない。

---

8 独立行政法人日本学術振興会優秀若手研究者海外派遣事業による。

9 2010 年 8 月の調査でご一緒した風間伸次郎先生（東京外国語大学）の報告が、風間（2011）にある。

記録に関するもう一つの課題は、今日話されるウイルタ語を記録することである。筆者の調査では今日のサハリンでウイルタ語を母語として話せる人は 20 人に満たない。だが、少なくともワール村では話者同士がウイルタ語で会話しているし、他にも潜在的に語彙や表現を記憶している人がいる。また、母語話者とは別に、ポロナイスクとノグリキには若い世代の学習者もいる。たとえ少数でも「いま」話されている言語の姿や状況を記録することが重要であると考える。

次に、研究に関する課題を挙げたい。その一つ目は、類型論的な観点からウイルタ語の文法を記述することである。池上（2001）などに著されたウイルタ語文法は、ツングース諸語の比較研究にもとづく用語や分析の仕方が専門的で、他言語の研究者には若干わかりにくい。Tsumagari（1985, 2009）は、そうした池上先生の文法記述を類型論的な観点から概略している。このように池上先生の文法をさまざまな角度から捉えなおすことも、今後はますます必要になってくるのではないだろうか。

研究に関する課題の二つ目は、ウイルタ語の方言差を明らかにすることである。筆者の調査では、池上（1994 [2001]）で指摘されたこと以外にも、南方言と北方言で相違する点がいくつか見られる。ここ 60 年来のサハリンで起こった言語変化（とくにロシア語の影響）も視野に入れて、こうした方言差を整理しておきたい。

最後に、「フィールド」への還元を課題として指摘したい。池上先生の「ウイルタ語学」を、ロシア語圏でも一般に読めるようにしてほしいという声がある。文字教本（Ikegami et al. 2008）はその第一歩だったが、これはウイルタ語のわかる教師がいてこそ使える教材で独学には向かない（笹倉 2009 参考）。ほかに、わかりやすい文法書や辞書[10]が必要とされている。読み物としては、津曲先生が監修しビビコワさんがロシア語で逐語訳をつけたテキスト集（Ikegami 2007；池上 2002b の一部露訳）があるが、子ども向けで読みやすい対訳のテキスト集が欲しい、などと現地からの要望は多い。こうした要望にできる限り応えていくことも、池上先生の研究から受け継ぐ課題だと考えている。

参考文献

池上二良

1949「ツングース語オロッコ方言のその近隣方言間における位置」『民族学研究』14(2): 54-58［池上（2001: 232-246）に補遺付再録］.

1953「ツングース語オロッコ方言の母音音素 ö について」『言語研究』22・23: 75-78［池上（2001: 136-140）に再録］.

1956 “The Substantive Inflection of Orok”.『言語研究』30: 77-96［池上（2001: 3-23）に再録］.

1959 “The Verb Inflection of Orok”.『国語研究』9: 34-73［池上（2001: 24-72）に再録］.

1971「十九世紀なかごろのオロッコ語集：サンタン語・ギリヤーク語をふくむ 」『北方文化研究』5: 79-184［池上（2002a）に補遺付再録］.

1977「ツングース語の生きた教科書　ウイルタ族の婦人を通し文法など研究」『日本経済新聞』1977（昭和 52）年 12 月 23 日，24 面.

1979〔編集・解説〕『ウイルタ古画集録』（昭和 53 年度ウイルタ民俗文化財緊急調査報

[10] ロシア語のウイルタ語辞典には Ozolinja（2001）、Ozolinja & Fedjaeva（2003）があるが、共編したフェジャエワさんも認める誤植や不確かな情報が含まれている。池上（1997）は（日本語のわからないウイルタ語話者たちが見出し語だけ見ても）信頼性が高いといい、ロシア語訳が期待されている。

告書 1）北海道教育委員会　北海道文化財保護協会.
1982〔解説〕『ウイルタの暮しと民具』（昭和 56 年度ウイルタ民俗文化財緊急調査報告書 4）北海道教育委員会　網走市北方民俗文化保存協会.
1983〔編〕『川村秀弥採録カラフト諸民族の言語と民俗』（昭和 57 年度ウイルタ民俗文化財緊急調査報告書 5）北海道教育委員会　網走市北方民俗文化保存協会.
1984「カラフトのウイルタ族の英雄物語とその伝来」『東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所通信』52: 1-4［池上（2001: 213-221）に再録］.
1986a〔編〕『「ぎりやーく・おろっこ器物解説書」・北川源太郎（筆録）「ウイルタのことば（1）」』（昭和 60 年度ウイルタ民俗文化財緊急調査報告書 8）北海道教育委員会　網走市北方民俗文化保存協会.
1986b「佐藤チヨさんへの告別のことば」『北海道の文化』54: 5-6. 北海道文化財保護協会.
1987a「「ウイルタ民俗文化財緊急調査」をふりかえって」『北海道の文化』56: 12-20, 北海道文化財保護協会.
1987b「ウイルタ語・オルチャ語研究における B. ピウスツキ」『ピウスツキ資料と北方民族文化の研究』(『国立民族学博物館研究報告別冊』5 号), pp. 275-282［池上（2001: 222-231）に再録］.
1990「日本語・北の言語の単語借用」『北海道方言研究会会報』30: 2-12, 北海道方言研究会［池上（2004: 272-285）に再録］.
1992「北アジア言語の動詞の構造と格支配：動作対象の表示に関して」宮岡伯人（編）『北の言語：類型と歴史』pp.　297-313, 三省堂［池上（2004:48-66）に再録］.
1993「最近のウイルタ語研究およびウイルタ語の現状」『アークティックサークル　北海道北方民族博物館友の会　季刊誌』6: 4-8, 北方文化振興協会［池上（2001: 284-293）に再録］.
1994「ウイルタ語の南方言と北方言の相違点」『北海道立北方民族博物館研究紀要』3: 9-38.［池上（2001: 247-283）に再録］.
1997『ウイルタ語辞典』北海道大学図書刊行会.
2000「本研究プロジェクトと北方言語研究」『危機に瀕した言語について：講演集（一）』pp. 73-76, 大阪学院大学.
2001『ツングース語研究』汲古書院.
2002a『ツングース・満洲諸語　資料訳解』北海道大学図書刊行会.
2002b〔採録・訳注〕『増訂　ウイルタ口頭文芸原文集』大阪学院大学情報学部.
2004『北方言語叢考』北海道大学図書刊行会.
風間伸次郎
2011「ウイルタ語調査報告」『北方人文研究』4: 51-74.
川村秀弥
1940『土語と土俗』私製［池上（1983）で活字化］.
笹倉いる美
2009「【書評・紹介】池上二良ほか編『ウイルタ語を話しましょう』」『北海道民族学』5: 30-33.
中目　覚
1917『オロッコ文典』三省堂.
服部　健

1943「オロッコ語『北風と太陽』」『音声学協会会報』72・73.

2000『服部健著作集：ギリヤーク研究論集』北海道出版企画センター.

澗潟久治

1981〔編〕『ウイルタ語辞典』網走市北方民俗文化保存協会.

山田祥子

2008「方言差をどう『書く』か：ウイルタ語文字教本の表記と今後の記述研究」『日本言語学会第 137 回大会予稿集』金沢大学.

2010「【講演会等報告】講演と唄の夕べ：サハリン先住民族言語を伝え、残す」『北海道民族学』6: 102-109，北海道民族学会.

ローン，タチヤーナ（著），永山ゆかり・木村美希（共訳），津曲敏郎・加藤博文（監訳）

2005『サハリンのウイルタ：18－20 世紀半ばの伝統的経済と物質文化に関する歴史・民族学的研究』北海道大学大学院文学研究科.

Ikegami, J.

1993 “A Brief History of the Study of the Uilta Language”. 村崎恭子（編）『サハリンの少数民族：サハリンにおける少数民族の言語に関する調査研究 ：サハリンアイヌ語、ウイルタ語、ニブフ語』（文部省科学研究費補助金（国際学術研究）研究成果報告書（1990-1992））pp. 65-71.［池上（2001: 294-308）に再録］

1994 “Poekt pis’mennosti ujl’tinskogo jazyka”. *Acta Slavica Iaponica*, Tomus XII: 253-258, Sapporo: The Slavic Research Center, Hokkaido University［池上（2001: 145-153）に再録］.

1996 “Pis’mennaja praktika na ujl’tinskom jazyke: Dopolnenie k proektu pis’mennosti ujl’tinskogo jazyka”. *Acta Slavica Iaponica*, Tomus XIV. pp. 120-123. Sapporo: The Slavic Research Center, Hokkaido University［池上（2001: 154-159）に再録］.

1998 “Pis’mennaja praktika na ujl’tinskom jazyke: Prodolzhenie”. *Acta Slavica Iaponica*, Tomus XVI, pp. 181-183. Sapporo: The Slavic Research Center, Hokkaido University［池上（2001: 160-164）に再録］.

2007 *Skazanija i legendy naroda ujl’ta*. Sapporo: Graduate School of Letters, Hokkaido University.

Ikegami, J., E. A. Bibikova, L. R. Kitazima, S. Minato, T. P. Roon, I. Ja. Fedjaeva eds.

2008 *Uiltadairisu: Govorim po-uil’tinski*. Yuzhno-Sakhalinsk: Sakhalinskoe knizhnoe izdatel’stvo [Sakhalin Indigenous Minorities Development Plan 2010. http://www.simdp.ru/eng.php?id=58 から入手可（2011-12-14 確認）].

Majewicz, A. F.

1987 *Materials for the Study of the Orok (Uilta) Language and Folklore II: Grammatical Notes on Orok, Orok texts Orok-Polish Dictionary*. Poznan: Adam Mickiewicz University.

Missonova, Ljudmila I.

2006 *Ujl’ta saxalina: Bol’shie problemy malochslennogo naroda*. Moscow: Izdatel’stvo “Nauka”.

Nakanome, A.

1928 *Grammatik der Orokko-Sprache*. Osaka: Oosaka Tooyoogakusha.

Ozolinja, L. V.

2001 *Oroksko-russkij slovar’: okolo 12000 slov*. Novosibirsk: Izdatel’stvo SO RAN.

Ozolinja, L. V. & I. Ja. Fedjaeva

2003 *Oroksko-russkij i russko-orokskij slovar’*. Yuzhno-Sakhalinsk: Saxalinskoe knizhnoe

izdatel'stvo.

Roon, T. P.

1996 *Ujl'ta saxalina: Istoriko-etnograficheskoe issledovanie traditsionnogo xozhjajstva i material'noj kul'tury XVIII - serediny XX vekov*. Yuzhno-Sakhalinsk: Saxalinskoe oblastnoe knizhnoe izdatel'stvo/ Saxalinskij oblastnoj kraevedcheskij musej.

Sakhalin Energy Investment Company Ltd. （本文中では SEIC と略す）

2010 *Sakhalin Indigenous Minorities Development Plan: Second Five-Year Plan (2011-2015)*. http://www.simdp.ru/?id=20&pid=4 （2012-01-30 確認）

Tsumagari, T.

1985 "Grammatical Outline of Uilta".『アジア・アフリカ文法研究』14: 1-15, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

2009 "Grammatical Outline of Uilta (Revised)". In *Journal of the Graduate School of Letters*, 4: 1-21, Sapporo: Hokkaido University.

Prof. Ikegami and the Study of the Uilta Language

Yoshiko YAMADA
(Hokkaido Museum of Northern Peoples)

This paper intends to introduce Professor Jiro Ikegami's contributions to the study on the Uilta language. The contents are as below:

1. The Uilta and studies on their language
 1.1 About the Uilta people
 1.2 Some studies on the Uilta language (before Prof. Ikegami)
2. Prof. Ikegami's study
 2.1 On Hokkaido (1949~)
 2.2 On Sakhalin (1990~)
3. Contributions from Prof. Ikegami's study
 3.1 For the native community on Sakhalin
 3.2 For the younger generation of researchers